

児童の投能力向上を目指した運動教材に関する実践研究

— 運動感覚に焦点を当てて —

吉田 直樹 (新潟大学大学院 教育学研究科)

1. 研究背景および目的

児童におけるソフトボール投げの記録は、平成 20 年度から平成 28 年度において、低下傾向であることが報告されている。そのため、神経系の発達が著しい小学校低・中学年の時期に、投動作に類似した運動を豊富に経験させ、投擲距離の向上や投動作の習熟を目指すことが重要であると考えられる。

そこで、本研究は、低・中学年児童を対象に投動作における運動感覚に焦点を当てた運動教材を考案・指導し、その指導前後で児童の投擲距離と投動作の変容を明らかにすることで、考案した運動教材の有効性について検討することを目的とした。

2. 研究方法

○対象者 運動教室の趣旨に賛同し、参加を希望した低・中学年の男子児童 4 名 (7.8±1.2 歳)

○運動指導日と時間 平成 29 年 5 月 2 日、16 日、30 日 (計 3 回) 各 45 分間

○運動教材 ひねり感覚 (図 1) や体重移動感覚 (図 2)、ムチ動作感覚 (図 3)、リリース感覚 (図 4、5) の各感覚を養うことができるように工夫した教材を用いて、指導を行った。



図 1 リボスティック 図 2 タオルボール 図 3 紙鉄砲



図 4 くるくるりん 図 5 てるてるパラシュート

○ソフトボール投げ測定 運動指導前と指導後、さらに指導 7 週間後の計 3 回、ソフトボール投げの測定を実施した。その際、投げる動作を対象者の側面からビデオカメラで記録した。

3. 結果および考察

対象児童 4 名におけるソフトボール投げの値は、事

前で 9.0±4.1m、事後で 10.0±4.4m、事後 7 週間で 9.7±2.5m であった。事前と事後を比較すると、事後にソフトボール投げの値が有意に向上したことが示された (図 6)。

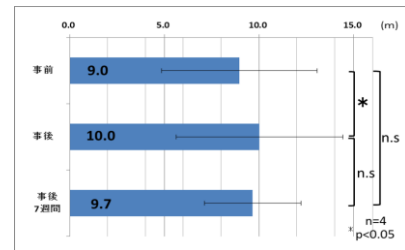


図 6 ソフトボール投げの平均値

本研究で考案した教材を用いた全 3 回の運動指導において、児童らは、納得のいく動き方を目指して、投動作と類縁性の高い運動を繰り返し経験していた。そのことが、児童のソフトボール投げの記録向上に影響したものと考えられた。

次に、全 3 回の測定全てにおいて、向上傾向を示した Sub. B (7 歳) を事例的に取り上げる。Sub. B は、事前から事後にかけて、ソフトボール投げの記録が 4.5m から 5.7m に向上した。投動作において、投擲方向に対して正面向きで、上体を後ろに反らして投げる動作であった Sub. B は、投擲方向に対して横向きに構え、上体と腕、肩を後方にひねり、投げ手と反対の足を前に出して投げる動作へと変化した。活動中の様子より、sub. B は、紙鉄砲やタオルボールの運動で、横向きに構え、大きく 1 歩を踏み出して腕を振る動作を自発的に繰り返し実施していた。つまり、類似運動の豊富な経験が、投動作の改善につながったものと考えられた。

4. 結論

今回考案した教材を用いた全 3 回の短期指導が、児童の投能力向上に影響を及ぼしたことがわかった。そのため、投能力の低下傾向が叫ばれている現在において、豊富に投動作と類似の経験をさせ、投げる感覚を補完しながら投能力を高めていくことは重要な観点になり得るものと考えられた。